

## ハイデガー・フォーラム第16回大会

### 応募要旨1

(統一テーマ：文学)

## 哲学・詩・地政学 ——「夕べの国」をめぐる——

マルティン・ハイデガーが論じた「文学」のなかでは、言うまでもなく、フリードリヒ・ヘルダーリンが質量ともに最大の存在を占めている。生前に刊行された著書『ヘルダーリンの詩作の解明』(GA4)のみならず、『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』(GA39)、『ヘルダーリンの讃歌「回想」』(GA52)、『ヘルダーリンの讃歌「イスター」』(GA53)などの講義録が刊行されており、またそれ以外の小品も数多くある。

両者の関係を扱った先行の著作では、ベータ・アレマンの『ヘルダーリンとハイデガー』(1954年)に代表されるように、『存在と時間』後のハイデガーが、ヘルダーリンの詩作を媒介にして、いかにしていわゆる「後期ハイデガー」のものとなる一連の概念を構築していったかについて検討される傾向にあるようである。これに対して、本発表が目指すのは、「哲学と地政学」と題すべきテーマである。

ヘルダーリンの詩のなかでも、ハイデガーが特に大きく扱っているのは、詩におけるナラティブの地理的な移動をとまなう作品であるといつてよい。例えば、「帰郷」では、冒頭でアルプスの山々が描写されたのち、ライン川とともに視点が移動し、ボーデン湖を経て詩人自身の故郷であるネッカー溪谷へといたる。「ライン」も同じくライン川をたどる詩ながら、こちらでは流れが一度は東方、アジアに向かいながらもアルプスに阻まれて西へと折れ、ドイツの野を潤してゆくことが語られる。「ゲルマーニエン」は、まずギリシアから語り起こされ、ゼウスの使いたる鷲がイタリアとアルプスを越えてゲルマニアに飛来する。「イスター」では、西から東へ流れるイスター、すなわちドナウ川とは敢えて逆に、インダスから西方へ到来するものが歌われる。「回想」は、ガロンヌ川に吹く北東の風とともに、ボルドーからインドへと船出する詩である。

これらの詩を論じていくなかで、ハイデガーは、哲学と地理的「場所」についての考察を深めていった。ことに、ドイツ(「西」)、ギリシア、アジア(「東」という三者の関係である。それによってもなつてあらためて浮上してくるのは、「夕べの国(Abendland)」の概念である。この言葉は、時として「西洋」と訳されるドイツ語であるが、単なる「西洋」ないし「ヨーロッパ」の雅称ではなく、対になる「朝の国(Morgenland)」を強く意識し、これに対抗しようとする意識を多分に有する、高度に抗争的かつ政治的な概念であり続けてきた(詳細はフォルカー・ヴァイス『ドイツの新右翼』新泉社、2019年を参照)。

本発表は、ハイデガーによる一連のヘルダーリン読解を手がかりに、後期のハイデガーがいかにして地理的「場所」を哲学に組み込んでいったのか、さらに、従来から行っていた「民族 (Volk)」や「歴史 (Geschichte)」に関する思索と相まって、それがいかなる政治的——「地政学的」——な意味を持つていくのかについて、解説を試みるものである。これまで、「ハイデガーと政治」テーマの研究の多くは、国民社会主義や反ユダヤ主義に対する彼の関与を焦点とするものに占められていた。本発表では、まったく別の角度から、そこに光が当てられることとなろう。

全体的な構成は以下の通りとする。

### 1. ヘルダーリンの詩の「地政学」の解明

まず、地理的「場所」に注目してヘルダーリンの主要作品そのものを再読解することになる。近年、ドイツ本国では「文学と地政学」あるいは「歴史哲学と地政学」テーマへの関心が深められ、ヘルダーリンについても、例えばクリストフ・V・アルブレヒトの研究が刊行されている (Christoph V. Albrecht, *Geopolitik und Geschichtsphilosophie 1748-1798*, 1998 Berlin)。これらを参照しながら、ヘルダーリンの詩それ自体の持っている「地政学」的認識を炙り出さなければならぬ。

### 2. ヘルダーリンの「地政学」とハイデガー

次に、ヘルダーリンを扱ったハイデガーのテキストに即して、ハイデガーがいかにしてその影響下に自身の思考を組み立てて行ったのかを検証する。最終的には、戦後のハイデガーの哲学、ことに歴史哲学が、「地政学」的観点から整理されることになる。その際には、ハイデガーの使用する「夕べの国」の語にも、あらためて光が当てられることとなろう。

そもそも、ハイデガーの活動した 20 世紀前半から中葉にかけては、主に「東」と「西」にまつわる地理的「場所」についての認識が、さまざまな分野の思考に入り込んできた時代であったといえる。ハイデガーのヘルダーリン読解にしても、そういった時代思潮と切り離して理解することはできない。最終的には、カール・シュミット、エルンスト・ユンガー、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーといった、ハイデガーと直接のやり取りのあった同時代人たちとの関係についても、本発表のテーマの観点から再検討を行うこととしたい。